

No. 6 : 街中に多面的な魅力

日本から香港への訪問者数は新型コロナウイルス禍前を大幅に下回っているようだ。近場では韓国がコロナ禍前を上回り、台湾も大きく回復する中で対照的といえる。香港では、日本人を見かけることが以前よりも少なくなったという声も聞く。

このような中、意外かもしれないが、香港政府観光局も日本人観光客の回復に向けてプロモーションを展開している。その一つ「Kawaii 香港」は、「アジアと西洋の文化が融合した、独特のカワイイ文化」を切り口として、交流サイト（SNS）などで街中の建築物やカフェ、雑貨店などを紹介する内容だ。

さらに7月には海外主要市場向けに「ONLY IN 香港」が始まった。ジャンク船やネオン、トラムなど「香港でしか出会えない体験と、この街に息づく唯一無二の魅力」を発信するもので、日本でも広告展開を行う予定となっている。

香港でしか出会えないといえば、尖沙咀（チムサーチョイ）の重慶大廈（じゅうけいたいか）かもしれない。両替店やインド料理店、安宿がひしめく大型ビルで、100を超える国・地域の人々が出入りするともいわれる。

少し古いが、沢木耕太郎著「深夜特急」にも登場する。内部は薄暗く独特の熱気を放ち、香港の奥深さを垣間見ることができる空間だ。「Kawaii 香港」に載る店がすぐそばにあるのも香港らしい。

重慶大廈とはまた異なる意味で奥深いのが沙頭角（とうかく）。香港北部に位置するこの街は、国境閉鎖区域の一部として一般の立ち入りが制限されていたが、最近、許可制で訪問が可能となった。

少し物々しい検問を抜けると、のんびりとした海辺の街並み。その目の前には人口約1800万人の巨大都市・深圳（しんぜん）。双方にまたがる通り「中英街」は立ち入り禁止で、ここから深圳への通行はできない。周辺には高い壁が張り巡らされるなど、境界を感じさせる場所だ。

方法は何であれ、夜景や飲茶だけではない多面的な魅力が伝わり、香港を訪れる人が増えていけば面白いだろう。現地を訪れると、その土地や人々への理解が深まり、新たな発見やつながりも生まれる。そうした積み重ねは、観光やビジネスなどの交流の土台となっていくかもしれない。当事務所としても、香港や海外をより身近に感じてもらえるよう、現地ならではの話題や情報を発信していきたい。



【重慶大廈入口付近の様子＝8月下旬、香港・尖沙咀】